

# 本のひろば

## 出会い・本・人

マイスター・エックハルトと

有村哲史君の思い出 阿部善彦

## 本・批評と紹介

絹川久子 著

沈黙の声を聴く 吉谷かおる

藤井 創 著

原発社会に生きるキリスト者の責任

東海林 勤

鈴木範久・田中良彦 編著

対照・太宰治と聖書 今高義也

加藤常昭 編

主が、新しい歌を

加藤さゆり説教集 森島 豊

近藤勝彦 著

人を生かす神の息 岡村 恒

宮崎彌男 訳

ウェストミンスター大教理問答 坂井純人

大宮 溥 著

新生の福音

救いの歴史と信仰の倫理 吉岡光人

シュヴェンクフェルト、フランクほか 著／木塚隆志ほか 訳

キリスト教神秘主義著作集12

十六世紀の神秘思想 深澤英隆

芳賀 力 著

落ち穂ひろいの旅支度 小島誠志

井上彰三 著

ペットも天国へ行けるの？ 大和昌平

ルイス・B・ウィークス 著／原田浩司 訳

長老教会の源泉 大石健一

アドルフ・フォン・ハルナック 著／深井智朗 訳・解題

キリスト教の本質 西原廉太

賀川豊彦 著

復刻版 小説 キリスト 佐藤 研

平山正実・堀 肇 編著

ヘンリ・ナウエンに学ぶ 斎藤 衛

既刊案内

書店案内



10

OCTOBER  
2014

# 人生の意味と神

信仰をめぐる対話

V・フランクル、P・ラビーデ著／芝田豊彦、広岡義之訳



強制収容所を生き延びた精神科医と、ユダヤ教の立場に立つ神学者の対話。人生の意味探求にとって「神」とは何か、人間とは何か、悪とは何か、祈りとは何かをめぐり真摯に語り合う。  
◆四六判・本体2400円

# フランクル人生論入門

広岡義之著（ひろおか氏は神戸親和女子大学教授）

すべての人生には意味がある。極限状況の中で人間性への透徹した洞察を獲得したフランクル。彼の根底にある深い「宗教性」に着目し、その思想を読み解き、生きる意味を学ぶ好著。



◆B6変・本体2000円

# キリスト教とローマ帝国

小さなメシア運動が帝国に広がった理由

ロドニー・スターク著／穂田信子訳

なぜキリスト教は短期間に伝播できたのか？ 社会学的分析手法を用いて明らかになったその理由とは？ 古代史の最大の疑問に対して、アメリカを代表する宗教社会学者が迫る。ピューリッツァー賞候補ともなった話題作。待望の邦訳。解説・松本宣郎  
◆四六判・本体3200円

## 催事案内

新教出版社 創立70年記念  
連続神学講演会 第3回（最終）

荒井 献氏「最後のパウロ  
——使徒行伝28章30-31節に寄せて」

10月25日土曜午後2時より日本基督教団  
信濃町教会にて。入場無料ですが事前にお  
申込をお願いします。

# 人間への途上に ある福音

ある福音  
キリスト教信仰論

たちまち  
重版！

J・フロマートカ著／佐藤優監訳

「人生の方向を定めた本」（佐藤優）

人間への  
途上にある  
福音

J・フロマートカ  
著 佐藤優 監訳

神の言葉の「受肉」の意味を徹底的に考え抜き、力強く展開した骨太な信仰論。  
◆四六判・本体3500円

# 神とはいったい何ものか

ジョン・ヒック著／若林裕訳  
次世代のキリスト教 ◆四六判・本体2700円



## 出会い・本・人

### マイスター・エックハルトと有村哲史君の思い出——阿部善彦

一四世紀の神学者エックハルトの思想に初めて触れたのは学部生の頃、上智大学で哲学を学んでいた時だった。クラウス・リーゼンフーバー教授の演習テキストの一つであった。数年後、博士後期課程に進んだ私はエックハルトをテーマに選んだ。リーゼンフーバー先生の許しを得て、早稲田大学の田島照久先生のゼミにも足を運んだ。田島先生は『エックハルト説教集』（岩波文庫）

の訳者である。快く受け入れてくださりエックハルトのドイツ語説教を中世の古いドイツ語の原典で一行ずつじっくり読んだ。そこで私は貴重な仲間も得た。その一人が有村哲史君である。歳は私より一年若く、すでに若き登山家として歩み始めていた。二年ほど経ったとき早稲田で読書会をやるうという話になりテキストを選んだ。有村君もその中にいた。その時に皆で読んだのがエックハルトの『教導講話』である。相原信作訳『神の慰めの書』（講談社学術文庫一九九三年）収録版から引用する。

「まず第一に決然己れを棄てることである！」（二二頁）。「神は実に現在の神である。今お前はどうかであるか、神の見給うのはそれであり、そうしたものとしてお前を受け取り、抱擁し給う。過去においてお前がいかなるものであったかは問題でなく、現在がいかなるものであるかが問題なのである。……あの使徒たちのこ

とを考えてみるがよい。彼らほど我らの主にとつて愛すべき親しむべきものがあつただろうか？ しかるに彼らの中の一人として罪に陥らなかつたものはない。皆それぞれ死に当たるほどの罪人だつたではないか。……我らの主は、罪によつて我らが彼の大いなる慈悲を知り、自ら戒めて真実の謙遜と敬虔とに至らんことを欲し給うのである」（五一―五二頁）

二〇〇八年、二七歳の有村君は修士論文を書くことになった。彼は『教導講話』を選び先の引用箇所にある「罪」の問題に取り組んだ。その夏、彼は以前からの計画でチベットのクーラカンリ峰に入った。渡航直前に偶然会つて早稲田の学食でゆっくり話をした。修論のこと、エックハルト、『教導講話』を語つて別れた。一〇月夕刊で彼の訃報を知つた。雪崩だった。辛く茫然と日々を過ごし何も手につかないことははじめてだった。私は自分の博士論文の準備を放棄し、ただ『教導講話』を読み返した。それしかできなかった。『教導講話』を読み、考え、書く、それだけが当時の私を前に進ませた。彼は去り、わたしはかわつた。私の人生に有村君が今もいることを『教導講話』を読むたびに感じる。

（あべ・よしひこ 立教大学文学部キリスト教学科准教授）

福音書に秘められた声なき声に促されて  
絹川久子著

## 沈黙の声を聴く マルコ福音書から



吉谷かおる

聖書のテクストは、古代の父権制社会の中で読み書きのできる少数のエリート男性の視点から書かれたものである。差別され、周縁化されていた人たちの声は、その中に反映されていなかったのではないか。——これはフェミニスト神学の「疑いの解読学」の視点であるが、本書を通して私たちに届けられた沈黙の声は、思いがけない雄弁さで私たちに迫ってくる。

多年にわたりフェミニスト神学のシーンを牽引してこられた絹川久子さんが近年の研究成果をまとめて上梓された本書のインパクトを多くの人と共有できることは大きな喜びである。『女性の視点で聖書を読む』（一九九五年）でフェミニスト神学に出会い学び始めたという熱心な読者は多い。待望のこの新刊はいつものように穏やかな語り口で緻密な論証を積み重ねたものであるが、そこには読む者を変革へと駆り立てる烈しさが込められている。まえがきにあるように、イエス運動のはじめからイエスに従い仕え続けた女性たちの沈黙の声を耳を傾け始めてから、著者は女性ばかりではなく社会の中で声を抑えられ、無視され、軽蔑すらされている存在の声なき声がいエスの中に多重音的に響き合うのを聴き取るようになった。

本書の第一部ではマルコ福音書から血の流れの中にいる女性、シリア・フェニキアの女性、持てるものすべてを献金した女性などの声が聴かれる。ゲラサ地方の悪霊たちに憑かれた男性、耳も聞こえずものも言えない息子とその父親の物語も取り上げられており、社会的少数者に属し、病や貧困、苦しみの中にある人々がイエスとの邂逅を経験することで何が起こったかが描かれる。また第二部ではより広い歴史的・社会的コンテクストから血にまつわる因習、セクシュアリティ、イエスの草の根の（政治）経済学、贖罪論、イエス誕生物語が検討される。覇権主義とそれがもたらす権力構造に関心を抱く著者が、脱植民地批評のアプローチにより得た新たな視点の成果も本書に見ることができ。

『女性たちとイエス』（一九九四年）ではマルコ福音書に登場する女性たちがイエスとの間に築いた相互行為的關係が考察されるが、本書でも名もなき女性たちがイエスとの相互関係の主導的立場に立ち、イエスが「真のイエス」となるように働きかけることになるプロセスには引き込まれる。どの章にも発見があるが、私は血の流れの中にいる女性の物語（第一章）と血の

汚れをめぐる考察（第六章）に最もインスパイアされた。この女性の抱える「苦しみ」は他人事ではないからである。この女性は血の汚れ、女性であること、保護者を持たず共同体から疎外されていることといった何重もの差別の中に置かれていたが、人間として生きるための全体性の回復を求めてイエスに最後の望みを賭け、能動的行為に打って出た。苦しみからの解放はイエスの感性による柔軟な対応があつてのものであるが、一方的にイエスが恩恵を施したわけではなく、意識的に立ち上がる女性とイエスが出会い、お互いの解放を認め合うことの中で起こる。シリア・フェニキアの女性にもいえることだが、颯爽としたわかりやすいロールモデルだけが勇気を与えてくれるわけではないということであらためて教えられた。

最終章（第一〇章）の「イエス誕生の秘話——衝撃の連続」はまさに衝撃的で圧巻であるが、その背景には著者の「なぜイエスのような激しい生き方に距離を置いて生きているのだろうか

## 介入する神の言葉

### 洗礼を受けていない人への説教

W・H・ウィリモン 上田好春 訳

未受洗者に福音の力をどのように聴いてもらい、どのように語るのか。加えて説教七本を収録。

四六判・280頁・2562円

異質な言葉の世界  
洗礼を受けた人にとっての説教  
▶好評発売中 2,376円  
姉妹編

## グループによる聖書の学びのための「How to」本登場 グループで聖書を学ぶABC

R・ヘステネス 朴憲郁／上田好春 訳

信徒を主体とした聖書のグループ学習法を20通り収録。特徴や進め方などを示し、わかりやすく解説。

A5判・232頁・2562円

日本キリスト教団出版局  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457  
E-mail eigy@bp.uccj.or.jp (価格8%税込)  
<http://bp-uccj.jp>

か」という自らへの問いがあつたことを知った。フェミニスト視点に立つ聖書解釈や神学の実践は私たちにこの社会の現実と向き合うことを求める。私たちは本書によって権力と闘い差別を克服する主体へと変え、現実の社会に深く関与することを促すかそけき声をともに聴き分けるように招かれている。私は礼拝の終わりに派遣の唱和をする時、本心に立ち上がって外へ出ようとしているのだろうかと自問することがある。

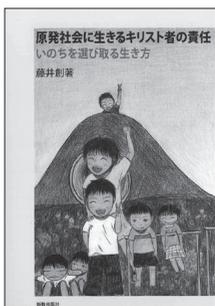
私たちは誰のもとに、なんのために派遣されるのか。それを考える時に、本書は厳しくまた温かく背中を押してくれるだろう。著者の後継世代として先達に恵まれたことを感謝するとともに、この一冊に込められたメッセージを続く世代に引き継いでいく責任を感じる。

（よしたに・かおる 翻訳業、日本聖公会管区女性に関する課題の担当者）  
（四六判・二二二頁・本体二五〇〇円＋税・日本キリスト教団出版局）

# 原発社会に生きるキリスト者の責任

事実を直視し生き方を問う  
藤井 創著

いのちを選び取る生き方



東海林 勤

この本は「第一部 福島原発事故の全体像を理解する」と「第二部 原発社会に生きるキリスト者」から成っている。第一部は理解すること、第二部はその理解に基づいて、キリスト者として責任ある生き方を選ぶことである。

第一部はチェルノブイリ原発事故（1986年）の巨大さから始まる。ウクライナ、ベラルーシ、ロシア3国に放出された放射性物質の量は広島原爆の800発分。216の町村が廃虚となった。以後20年間に健康被害者700万人超。その後も増加の一途を辿っている。しかも汚染は広くヨーロッパ全域に及んだ。中絶、早産、流産等が増える。被災地を脱出した子どもたちは受け入れ先で「チェルノブイリ人」と呼ばれ、差別された。

福島原発事故はチェルノブイリと同様の「レベル7」という最悪の事故であるが、1〜3号機の燃料棒メルトダウンと4号機爆発大破のためにチェルノブイリのように石棺で覆うこともできず、大気汚染が続き、汚染水も絶え間なく大量に漏れ出している。近海はもとより、10年後には太平洋全域が死の海となる。

らに、日本はあの被爆地よりはるかに人口密度が高い。あの地域では被曝の結果、25年間に100万人が死んでいる。私たちは次の25年間で100万人を超える日本人の犠牲者を直視せざるをえなくなる。」

紙数制限ゆえ他の重要事項を割愛して第二部に移る。ここでは、キリスト者として原発社会にどう生きるかを問う。そして著者はそれを徹頭徹尾「差別」問題と捉えている。ウラン鉱山では燃料用のU（ウラン）235を取り出し、U238は残土として放置される。U235を数グラム取るために2億トンの放射性残土。労働者にも周辺住民にも一切被曝の事実は知らされない。何万人が犠牲にされたことか。

都会による過疎地差別。東電は関東、とくに首都圏で使う電力のために、遠い新潟と福島に原発を建てた。利益は都会に、リスクは過疎地に。関電の京阪神対「原発銀座」福井も同じ構図である。また北海道泊村の財政を潤す原発マネーは「被曝料」と言うほかない、泊村のガン死亡率は北海道の平均に比べ、極めて高い。

さらに深刻なのは、高濃度放射性廃棄物の問題である。文部科学省は昨年8月、2ヶ所あった深地層研究所を北海道北部の幌延にある深地層研究センターに一本化した。ここに高レベル廃棄物を押し付けてよいのかということである。著者は学生と共に掘削中の穴に150mまで降りたが、軟弱な砂地で水がに

るという予測もある（ドイツのキール海洋研究所）。

さらに危険な問題は、福島県の日常空間線量が高いことである。文部科学省は福島県の幼稚園・保育園・小中学校の空間線量を年間20ミリまで問題なしとした。しかし市民団体独自の調査で福島の小中学校の校庭の多くは原発作業員と同程度に被曝することがわかった。1991年に制定された「チェルノブイリ法」は、①年間20ミリ以上は立ち入り禁止地域、②年間5ミリ以上は退去対象地域、③年間1〜5ミリ以上は移住権利居住地域と定めている。日本政府は「即時退去」にするべき汚染地域に子どもや母親たちを封じ込めているのである。

しかも汚染は福島だけではない。周縁の県と関東地方も汚染され、とくに空間線量が高いホットスポットが数多くある。このような土壌は空気・水・農作物を汚染し、居住者の内部被曝のリスクは免れない。

著名なオーストラリアの小児科医、ヘレン・カルディコット博士は、日本の現状をこう語る。——「福島事故はチェルノブイリより2・5倍から3倍の放射性物質を放出している。さ

じみ出ていた。（その後、六ヶ所村で頑丈なキャスクに入れて乾式・空冷式に保存する案が浮上したようだが。いずれにせよ）何万年もの長期間、未来世代に大きな負担をかける。

六ヶ所村の再生処理工場や福井の「もんじゅ」への政府のこだわりは、核武装推進の道のことであることを著者は力説している。

最後に、著者は原発問題の原点として「福島」に帰る。多くの先人の名言を挙げてキリスト者の責任を問うが、帰する所は北海道に避難して来られた福島母親たち・子どもたちとの出会いである。藤井さんはその人々の発言を豊かに記している。悲しみと憤り、故郷への想い、心を苛む日常の不安、だが自分の選択を良しとして新しい人々とのつながりを求め、はつきりした主張を持つ。大人は大人で、子どもは子どもで不安な圧力をはねかえし、自由に生き始めている。藤井さんは悲しむ人々の悲しみに連なるとき、その出会いの中にイエスがおられるのを経験されたに違いない。

私は、20世紀中葉から原発という途方もない誤りを防ぐために力を尽くさなかった者として、大きな罪責を負う。著者はこの書で、もう老人である私に少しでも償いをするように励ましてくださった。

（しょうじ・つとむ＝日本基督教団隠退教師）

（A5判・二〇〇頁・本体一三〇〇円＋税・新教出版社）

人間の〈弱さ〉と対峙する太宰文学の基礎資料  
鈴木範久・田中良彦編著

## 対照・太宰治と聖書



## 今高義也

「日本文学」とキリスト教の問題、ことに近現代日本の文学者が聖書をどのように読み、それをどのように作品世界に反映させたかということは、興味の尽きない問題である。昨年、「現代文」の授業で夏目漱石の『三四郎』を高校生と共に読む機会があったが、「迷える子 (Stray Sheep)」(マタイによる福音書十八章十二〜十四節)や「われは我が怨を知る。我が罪は常に我が前にあり」(詩編五十一篇五節)など、聖書を〈引用〉しつつ日露戦後の日本社会で〈道に迷う〉青春を描いたこの作品から、漱石におけるキリスト教＝聖書の意義について改めて考えさせられた。

太宰治とキリスト教の関わりについても、以前から気になってはいた。もちろん聖書との関わりということでもなくとも、『人間失格』は私自身学生時代に読んで衝撃を受けた者の一人であるし(現在も夏の「読書感想文」課題の定番である)、一部の教科書に収録されている「富岳百景」は授業を通して大変興味深く読んだ。ともあれ、本書の編者の一人である田中良彦氏の『太宰治と「聖書知識」』(一九九四年、朝文社)を図書館

で偶然見出した時の新鮮な驚きは、今日なお忘れがたい。太宰が塚本虎二の主宰する雑誌『聖書知識』を愛読していたこと自体、不明にして当時の私は知らなかったのであるが、太宰作品と『聖書知識』記事との対応関係を上段・下段に「対照」させて示した堅実・精緻な手法に、深い感銘を受けたのである。

本書のもう一人の編者である鈴木範久氏が巻頭の「はじめに」で述べておられるように、鈴木氏と田中氏は、何年も前からそれぞれ別々に太宰の全作品に現れる聖書の言葉をまとめる仕事に携わってこられたが、それが「たがいに判明した段階で、二人のものをつき合わせ」ることにより、一層精度の高い資料として整備された本書が完成した。日本の文学者や思想家における聖書の受容について広範な資料調査と研究を積み重ねてこられた鈴木氏と、太宰とキリスト教の関係について精緻な探究を重ねてこられた田中氏との共編になるこの資料集は、今後、太宰文学ひいては日本文学とキリスト教の関わりを問う際の必読文献となるだろう。

本書の各頁は、上段に太宰作品の抜粋、下段にそれに対応す

るとみられる聖書(太宰が読んでいたと推定される新約Ⅱ「大正改訳」と旧約Ⅱ「明治元訳」)の抜粋が「対照」される形式になっている。冒頭に置かれた田中氏の「利用にあたって」にもあるように、太宰作品と聖書本文が、それぞれ当該箇所前後を含めて抜粋されることにより、太宰による〈引用〉の文脈と聖書本文の文脈との「ズレ」、すなわち太宰文学における聖書の〈読み替え〉を吟味検討できるのが、本書の特長となっている。

資料の配列は基本的に聖書の文書順になっているが(ただし新約が先)、やはりマタイによる福音書からの〈引用〉の多さが目を引く。いわゆる「山上の垂訓」をはじめとするイエスの言葉への傾倒から、太宰の聖書理解の通説として「律法的」(佐古純一郎)ということがいわれるが、今回この資料集を一読して改めて感じさせられたことは、聖書の〈引用〉箇所の多寡によらず、太宰が人間の「弱さ」と向き合う文学的な〈深

さ〉である。例えば、太宰の「ユダ」が物語る『駆け込み訴へ』。出エジプト記を踏まえつつモーセの苦悩に共鳴を示す『惜別』。「我が微弱を誇らん」とのコリント後書の〈叫び〉を引いてパウロへの共感を示す『パウロの混乱』。――聖書の中に見いだされる人間の「微弱」に限りない共感を寄せる太宰は、かような〈弱さ〉を抱える「己を愛し」かつ同様に「隣人を愛せよ」とのイエスの呼びかけに、振り返らずにはいらなかったのではないか。

いずれにしても、今日なお愛されてやまない太宰作品の秘密を解く重要な鍵が、本書によって提供されることは間違いない。同時にそれは、今後漱石や芥川その他の日本文学においても同様の資料集の整備が待たれるという課題を、改めて浮き彫りにしている。

(いまだか・よしやⅡ宮城学院中学校高等学校教諭)  
(A5判・一九二頁・本体三八〇円+税・聖公会出版)

## 聖公会出版

――新刊案内――

### 対照・太宰治と聖書

編著●鈴木範久・田中良彦

本書は愛読者の絶えない太宰の作品と聖書についての本格的な資料。キリスト教関係者のみならず、近代日本文学に関心がある者にとって垂涎の著作。



(A5判 本体定価3800円)

### ヨハネ福音書と教会

日本版インタープリティション85号

総合監修●月本昭男・大貫隆・西原康太

ヨハネ福音書は「教会の書」と呼ばれる。それは教会のあり方、個人の信仰のあり方を問いつけているからである。本号は改めてヨハネ福音書を読み直すときのよい手引きとなるはずである。



(A5判 本体定価2000円)

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1  
☎03(3235)5681 FAX 03(3235)5682  
http://seikokai-publishing.jimdo.com  
nsk-bookshop@company.email.ne.jp

神の救いの現実へと導き入れる説教  
加藤常昭編

### 主が、新しい歌を 加藤さゆり説教集



森島 豊

私も先に本書を手にした妻は開口一番「う言った。「読みやすい。分かりやすい」。実際に手にとって読んでみると、自然と心の中に言葉が入ってくる。一見難しい旧約聖書の言葉も、自分のこととして聴くことができる。そして、説教を通して聖書を読みたくなる。本書のどこを開いても、加藤さゆり先生の優しき、人柄、そして信仰が伝わってくる。

本書は一人の女性伝道者・加藤さゆり先生の説教集である。これを編んだのは夫である神学者・加藤常昭先生である。素朴に聖書を語るその言葉が、驚くほど心に響く。さゆり先生は複雑なことは語っていない。ただ聖書の現実と聴衆の現実を率直に語っておられる。その聖書が証しする福音の力に引き込まれていくのである。

「家庭的な声」（七頁）と評されたこともあるこの説教者の言葉は、牧会的な声（魂への配慮）として響いている。育児の苦労、人間関係で疲弊した心、厳しい闘病生活の孤独、その全ての心に寄り添っておられるのが分かる。回りくどい言い回しなどしていない。聴き手の現実にもスッと入ってくる。教会に生き

中でも、病を抱えている者への共感を強く感じる。おそらくご自身が病の苦しみをよく知っておられたからだと思う（三三、六〇頁）。病を負う聖書の詩人の経験を紹介しながら、詩人を生かした神の救いの現実へと導かれている。キリストの福音に生かされている説教者自身の信仰告白の言葉としても聴こえてくる。福音に生かされている伝道者の言葉を聴いて、慰められた人々がどんなにいたかと思う。

女性伝道者であるが故の苦労も多かったと思う。けれども、その苦労を微塵も感じさせないしなやかさを感じる。受け取る人によっては失礼と思われる言葉をも、さゆり先生は柔軟に好意的に受け止めておられる（四一五頁、一一九―一二〇頁）。それは先生の性格だけではなく、そのように先生を生かしてきた福音の力によるものだと感じる。「柔和な心」という説教は必読である（二一六―二三六頁）。誰に対しても柔和な心そのもので接したさゆり先生のごがよく分かる説教である。

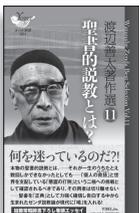
### 渡辺善太著作選①

＊ヨベル新書024 待望の復刊！

## 聖書的説教とは？

加藤常昭師による  
書き下ろし  
巻頭エッセイ

お待たせしました！



神学者・加藤常昭師による書き下ろし巻頭エッセイ「なぜ『聖書的説教とは』は必読すべき書物なのか」を収録。如何に現代の教会がこの本の持つ大切な意義が語り尽くされる、牧会者必読の本に仕上がっています。  
◎新書判美装・三三〇頁・一、八〇〇円＋税  
辻哲子先生 現実から投げかけられた問題を受け止めつつ、聖書に向き合い、六十六巻の正典から縦横無尽に適確な御言葉をもって問い返され……その考察を鋭い洞察力をもつて説き明かす聖書的説教。（本のひろば「著作選①書評より」）

る人と共に過ごし、よく話を聴き、惜しむことのない愛の労苦の中から紡ぎだされた言葉であることがよく分かる。まるで母に語り掛けられているように素直に聴くことができる。

けれども、説教者は闇の中に止まらない。私たちの知る罪の闇の世界から、キリストの現実へとすぐに引き込んでいく。その優しい人柄からは想像できないほど力強い言葉で語っている。しかも説教者の直感ではなく、聖書そのものを紹介している。人が経験する暗闇もキリストの現実も、すべて聖書の言葉を通して紹介しているので、安心して聴くことができるのである。

また時に、雷のような鋭い言葉で目覚めさせる。「人間が生み出したものに、人間を救う力はないのです。神がなしてくださらなければ、人間の救いは成り立たないのです」（三三二―三三九頁）。どこを開いても、この説教者の揺るぐことのない神への信頼が感じられる。御言葉への確信を慰めの言葉として宣言している。聴き手は自然に聖書の信仰に心を合わせ、神へと導かれる。何よりもこの説教者自身が聖書の言葉に魅了されており、聖書の言葉を味わう喜びにこちらも引き込まれていく。

本書からは、キリスト者の夫婦がこの地上での最後の日々をどのように過ごすのかについても深く教えられる。厳しい病床生活にあるさゆり先生を看取られている加藤常昭先生は、この人を生かし続け、今も生かしておられる神の現実にも耳を傾けられた。そのキリストの愛の言葉は、ご自身だけでなく、多くの人の慰めの言葉として響くに違いないと確信しているのだと思う。

私の妻は、心病む友人のために毎日一つ、さゆり先生の説教集から心に響く一節を送っている。本書には自然とそのような他者に贈りたい言葉があふれている。説教者にも信徒にも求道者にもぜひ勧めたい一書である。

（もりしま・ゆたかⅡ青山学院大学准教授、大学宗教主任  
（四六判・三三八頁・本体一五〇〇円＋税・教文館）

### マイケル・オー著 和解を通して

Reconciled to God  
「ローザンヌ運動」の新総裁！  
神の和解と宣教を語る！

世界ローザンヌ運動新総裁に選出された42才のマイケル・オー博士が神の和解と宣教を語る本邦初の著作。  
＊ヨベル新書025  
64頁・400円＋税



金本 悟師：マイケル・オー新総裁のために、ローザンヌ運動と日本の教会も含めた世界の教会との良きパートナーシップのために、祈りをもってお支えください。（元日本ローザンヌ委員会委員長）

株式会社ヨベル YOBEL, Inc.  
info@yobel.co.jp  
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1  
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858  
＊自費出版の専門出版社＊

聖霊の助けによって信仰を与えられる  
近藤勝彦著

## 人を生かす神の息

聖書から聞く現代へのメッセージ



岡村 恒

「若い牧師たちの説教の戦いに少し励ましを与えることができれば幸い」（はじめに）との祈りと願いが、この説教集からあふれ出ています。同時に、若い説教者たちだけでなくむしろすべての信仰者、聖書の福音を求める聞き手に、豊かな慰めと励ましとを差し出す一冊です。

近藤勝彦先生一〇冊目の説教集である本書は、表題の通り「神の息」によって生かされる信仰者の幸いを、余分な混ざりものが何一つない言葉を重ねて描き出しています。読み始めた途端に、まるで礼拝の場に身を置いて、直接耳にしているかのように、豊かにあふれ出てくる言葉に出会うこととなります。

この説教集には、二〇一一年から二〇一三年にかけてなされた説教から二九篇が収録されています。旧約聖書から五篇、福音書から一五篇、使徒言行録と書簡から九篇です。聖書全体から、色とりどりのメッセージが語られているようでありながら、主イエスの十字架と復活の福音に立つ信仰だけが命の源であることが徹底して語られています。東日本大震災以後の説教は、私たちの世界が大きな問いに直面し、真実の慰めが求めら

れている中で語られた説教です。またこの時期は、東京神学大学の学長職後半期と学長職を退かれた時期で、ご自分に託された大きな使命を担い、受け渡していく中で語られたものでしょう。しかしこの説教集には、「説教という、人間にとって本当は不可能な、しかし幸いにも許された務めに召されたこと」への感謝があふれ出ています。繰り返し「キリスト者というのには」という言葉が登場します。神に召され、聖霊の助けによって信仰を与えられた者として、聖書が明らかにする「キリスト者の幸い」をひたすら語り続けることが、説教の務めに召された感謝を表す唯一の道に他ならないからです。

「第一部 旧約聖書からのメッセージ」では、大災害のさ中においてもなお確かな希望を支える「創造の信仰」の力強さや、罪の赦しの洗礼によって聖霊を受けて新しく創造されて「生きる者」とされる幸いが、大胆に説き明かされています。キリスト者というのには、「今日も神の人工呼吸によって胸いっぱい命の息を吹き入れられ、……生きる者にされている、……それを思い起こす人のこと」（二四頁）だとの言葉に触れる時、洗

礼によって生かされ、生かされ続ける恵みを、新しく受けとめることとなります。神の「選び」によって与えられる礼拝の生活、試練の中で繰り返し発見する神の摂理、先手を打って進めて下さる神の救いの御業。旧約聖書がよく知られた物語から、今ここで生きる私たちへの神の恵みが説き明かされていきます。

「第二部 福音書からのメッセージ」では、クリスマス、山上の説教、受難等の聖書箇所から、「キリスト者とは」どういう存在かが、さらに大胆に説かれます。信仰者には、「主イエスの死こそ命の源」と信じて告白し、主と共に居て下さることを繰り返し味わって歩むことが許されている。キリスト者は、「主に仕えられ、主に仕えて生きる者」であり、「キリストの足もと以外に行くところを持たない者」だと、力強く語られます。「第三部 使徒言行録ならびに書簡からのメッセージ」においては、使徒言行録から黙示録に記された教会の信仰が、私たち自身の信仰と重ね合わせて示されます。初代教会には「御言

葉を聞いて洗礼を受けた群れのなかで相互の交わり」（一六四頁）があり、「神の御業と神の御栄光」がその信仰生活の主題だったと。私たちの信仰生活の根本に「聖霊のうめきによる偉大な助け」があることは、本当に大きな慰めです。頁ごとに凝縮された言葉が新しい光を放っています。「今の課題の一つは、もっと削ること、シンプルにすること、……説教が単純になること」（あとがき）と言われる近藤先生の、次の説教集を心待ちにします。

（おかわら・ひさし）日本基督教団大阪教会牧師  
（B6判・二三四頁・本体一九〇〇円＋税・教文館）

## 潮義男 [著] 神の国の奥義 上下 完結!

（日本基督教団仙台青葉荘教会牧師、東京聖書学校教授）



神の国の奥義への誘いとなって心に深く迫る書！ この説教集はマタイ福音書の講解であるが、語られる内容は多岐にわたり、自由に語られる。カルト宗教、戦争責任告白への言及、日本の家族を巡る状況や非行少女の悲しみ、戦時中のホーリス弾圧、ドストエフスキーの文学等々。特に62歳で召された義兄西海静雄先生の闘病や祈りなど、感無量だった。まさに、「寄せ来る潮の流れに流されて」、深夜の書齋で一人静まって読み進むうちに、大きな魚のお腹のうちヨナが告白したような、深海の海草が頭に絡まりつく「経験をした。」（深谷春男師・評）

上巻・1章より14章・三六頁  
下巻・15章より28章・三〇頁  
●A5判上製・各二八〇〇円＋税

宗藤尚三 [著] 再版出来！  
核時代における人間の責任  
ヒロシマとアウシュビッツを  
心に刻むために

東北ヘルプ事務局長川上直哉先生・  
評：読後の印象は深い。「政治に  
おいては服従は支持と同じであ  
る」という宗藤さんの言葉は、今、  
厳しく響く。心して読み、深く  
沈思黙考を促される書である。

\*ヨベル新書 022・1,000円＋税

株式会社ヨベル YOBEI Inc.  
info@yobel.co.jp

〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1  
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858

\*自費出版の専門出版社\*

神を愛し、具体的に従うための指針として  
 最良の手引きの1冊  
 宮崎彌男訳

## ウエストミンスター大教理問答



坂井純人

本書は、改革派信仰、ピューリタン信仰の最高の精華の一つ、一七世紀の英国で作成されたウエストミンスター大教理問答の最新の日本語訳である。現代に至るまで、世界で広く用いられて続けているウエストミンスター信仰規準であるが、信徒教育には、小教理問答が一番、取り組みやすいと思われる。しかし、実は、小教理問答は、大教理問答の縮小版として作成されている。この点から鑑みると、同信仰規準の「心」をより深く正確に学ぶためには、実は、大教理問答の学びが不可欠なのである。その上で、有機的に信仰告白と大教理問答、小教理問答を関連させて学ぶ方法が望ましい。

この学びを実践する上では、親しみやすい翻訳が不可欠である。今回の宮崎氏による翻訳は、この点で最適である。これは、宮崎氏の優れた語学力にもよるが、自ら改革派信徒、牧師として、ご自身の信仰と改革派神学の理解とをこの大教理によって養われ続けて来たからである。この明解さは、大教理問答が、宮崎氏の血肉となった証である。そして、教会で信徒の方々と共に学び、福音的慰めをも共有された。まさに、信徒と共なる

作品であるからこそ生まれた血の通った翻訳と言える。従来の優れた翻訳に加えて、この翻訳が世に出る大きな意義の一つは、とても親しみやすい語感にあるのではないだろうか。特に、第一問の答「人間の第一の、最高の目的は、神の栄光を現し、神を永遠に、この上なく喜ぶことです」(傍線筆者)の訳は、素晴らしい。原文の *truly to enjoy* を「この上なく喜ぶこと」と訳されると「この上ない喜び」が感覚的にも鮮やかにされる思っている。

さらに、大教理問答の真髓の一つは、現代にも通じる十戒の深い理解にある。例えば、訳者は、大教理の第六戒の洞察の鋭さは、一連の原発関連事件に潜む問題にすら示唆を与えていると述べる(「訳者あとがき」)。十戒の意義は、時代を超えて、神の御前に生きるあらゆる人間生活に応用できる。時代が違っても鋭い罪の認識は、様々な個人倫理、社会問題の深層に迫る。さらに、福音の光における十戒の読み方の原則も教えられる。科学技術が進展し、倫理理解が多様化しても人が持つ問題と解決への道筋は、御言葉の中にある。本書は、キリストに

ある恵みの契約の内に教理と生活を一体化して捉えたピューリタンの信仰を学ぶ最良のテキストの一つである。装丁は明るく、サイズも持ち運びしやすいので、多くの信徒の方の良きガイドブックになるだろう。

学術的に重要な本文の問題であるが、底本は、スコットランド自由長老教会出版委員会による所謂、FP版(一九六七年、一九九四年)を中心としている。同時に、最新の本文批評研究を行ったバウアー(John R. Bower: *The Larger Catechism: A Critical Text and Introduction*, Grand Rapids: Reformation Heritage Books, 2010)のクリエイティブ・テキストも必要に応じて参照されている点に本文への厳密な姿勢が窺える。

宮崎氏は、若い日に、この大教理問答に出会った。そして、「こんなにすばらしい宗教があるのならば世界の果てにでも行って求道したいものだ、と思った」(「訳者あとがき」) そうで

ある。キリストが下さる救いへの「この上ない喜び」を湧き立てる力が、このウエストミンスター大教理問答を通して一人の信仰者に与えられたのである。これからの日本の教会でも、もっと多くの方々とこの喜びを共有したい。筆者もそのような思いにさせられた。この情熱を伝えて下さった訳者の労に心から、感謝を捧げたい。

(さかい・すみと) 北米改革長老教会日本中会東須磨教会牧師、神戸改革派神学校講師、神戸神学館教師  
 (A5判・100頁・本体2200円+税・教文館)



## 烈しく攻める者がこれを奪う

新約学・歴史神学論集

住谷眞

Makoto Sumitani



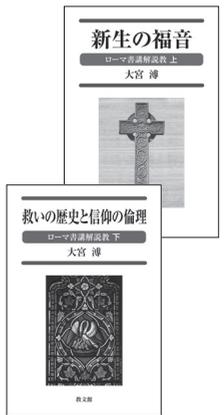
神学と文献学の間を  
 往還しつつ、  
 crux interpretum  
 (解釈者の難所)  
 に取り組んできた  
 筆者渾身の論文集。

A5判・上製・函入  
 定価【本体5,400+税】円  
 ISBN978-4-86325-063-5



株式会社 一麦出版社  
 札幌市南区北ノ沢3丁目4-10  
 TEL (011) 578-5888  
<http://www.ichibaku.co.jp>  
 携帯 [mobile.ichibaku.co.jp](http://mobile.ichibaku.co.jp)

読者の心に響く説教  
大宮 溥著  
新生の福音  
ローマ書講解説教 上  
救いの歴史と信仰の倫理  
ローマ書講解説教 下



吉岡光人

説教は、基本的にはその教会の会衆に対する牧会を任されている牧師がするのが普通である。従って説教者が説教を準備する時、その主日の聖書の言葉に密着しつつも、自分が責任を負っている会衆を思い浮かべつつ準備することになる。「自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている」という関係の中で、神の言葉が取り次がれるのである。従って、その日、その礼拝で語られた説教こそが説教者が存在をかけたものであって、後に文字になって残された説教集は、毎週、命をかけて御言葉を取り次いだ説教の記録と言わなければならない。

『新生の福音』及び『救いの歴史と信仰の倫理』は、現在日本聖書協会の理事長の重責を担っている大宮溥牧師が主日礼拝で語ったローマの信徒への手紙の講解説教を本としてまとめたものである。大宮溥牧師は一九七五年、大村勇牧師の後任として阿佐ヶ谷教会に赴任し、二〇〇三年まで同教会の主任牧師として牧会と説教の責任を担われた。『新生の福音』のあとがきに書かれているように、大宮牧師は阿佐ヶ谷教会に赴任した翌年の一九七六年からロマ書の講解説教を始め、本書はそれを土

台にし、多少の修正や補足を加えてできたものである。

この説教の全体的な特徴は、まず聖書テキストに即している点である。聖書テキストそのものを正しく読みとれるような配慮がなされている。時にはギリシャ語原文の説明が入り、著名な神学者の言葉やキリスト教の歴史に残る事件なども引用されていて、馴染みのない者にとっては一瞬「難しい」と感じるかも知れないが、それに続いて、わかりやすく身近な事柄を題材として説明されていることが多く、テキストそのものの理解を深めるための引用であることがわかる。こうした構成から考えると、大宮牧師の、深い教養に裏付けされながらも、誰に対しても紳士的に対応される誠実な人柄が形となって現れている説教だと言えよう。前述したように、牧会の責任を託された牧師として、羊の声を聞きわけ、魂の叫びに耳を傾けていたからこそ、その会衆の心に届く説教ができるのである。そしてその特殊性に徹したことが、四十年経った現在において、時間や場所を超え読者の心に響いてくる言葉となるのである。

ローマの信徒への手紙は、キリスト教信仰の中心的テーマを

扱っている大切な文書であることは言うまでもないが、説教する時は困難さを感じる。説明的になりすぎてしまつて会衆がついてこれなくなつてしまつてしまう退屈な説教か、その逆に会衆が離れて行かないようにと身近な話や今日的な題材を取り上げ、結果としてテキストから大きく離れてしまつてしまうという失敗を犯しやすい。大宮牧師の説教はそれらとは全く違う説教である。阿佐ヶ谷教会牧師として、会衆の信仰を養い、真の教会を建ててゆくために命を捨てる覚悟で、毎主日説教に取り組んできた一牧師の、説教の記録であり、同時にまた牧会の記録とも言える。しかしそれは、阿佐ヶ谷教会という個性を超えて、あるいは四十年前という時代を超えて、広く現在の人々に読まれるべきメッセージを持っているのである。

ロマ書の説教集はこれまでも有名な説教者によつて出されてきた。半世紀以上前に出版された、竹森満佐一牧師の『ローマ書講解説教』（全三巻、新教出版社）は歴史的な名説教集と

言われており、加藤常昭牧師の『ローマ人への手紙』（全四巻、教文館）もまた大変有名である。本書もまたこれから後にも多くの信徒に読まれ続けられるであろう説教集であり、「説教者にとつての一つのお手本」として読まれて行くことだろう。

本の体裁としては、大きさと厚さは手に取りやすいサイズであり、また、一つ一つの説教が読みやすい分量に編集されているのも読みやすくしている要素と言えよう。

（よしおか・みつひと）日本基督教団吉祥寺教会牧師、『信徒の友』編集長  
（新生の福音Ⅱ四六判・二三三頁・本体一八〇〇円＋税・教文館）  
（救いの歴史と信仰の倫理Ⅱ四六判・一七〇頁・本体一六〇〇円＋税・教文館）

**新教出版社**

**聖書歴史地図**

新教タイムズ プリチャード編 日本語版監修 荒井章三／山内一郎他

B4判・272頁  
本体26214円

壮大で立体的なカラー地図と図版600点に詳細な聖書時代史を配し、聖書学・考古学・オリエンタル学・言語学の総力を結集した画期的成果。学校、教会に必携。

**カラー版 聖書大事典**

ワイゴード編 日本語版監修 荒井章三／山内一郎

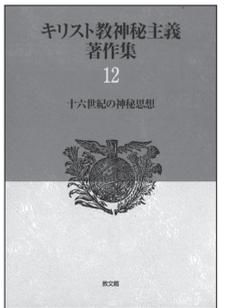
菊倍判・1100頁  
本体39806円

4千以上の聖書用語を71名の専門家が的確に解説。総カラー頁。

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1  
TEL: 03-3260-6148  
Email: eigyo@shinkyō-pb.com

時代の深淵の直視から構築された新たな世界像  
シュヴェンクフェルト、フランク、ヴァイゲル、アルント著  
木塚隆志、中井章子、南原和子訳

## キリスト教神秘主義著作集12 十六世紀の神秘思想



深澤英隆

「神秘主義」ということばは、色々な文脈でいまもなおいわゆる pejorative な（貶めるような）ニュアンスで使われることが少なくない。思想史においてこの語で呼ばれる思想群のもつ意義と影響力の大きさを考えると、この近代に生まれた語なしカテゴリーは、かえって思想理解の妨げとなってきたのかもしれない。いずれにせよ今日では、M・ド・セルトーの業績をはじめとして、神秘主義概念の系譜学的な見なおしが盛んになされている。

さてしかし、こうした呼称の問題にわずらわされることなく、神秘思想のテクストそのものを繙くならば、その豊かで冒険的な思想の展開に、私たちはしばしば圧倒されることになる。古代から近代にまでいたるキリスト教神秘主義の潮流をカヴァーした「キリスト教神秘主義著作集」の各巻で、そのことは実感される。そしてその第二巻、『十六世紀の神秘思想』がこのたびついに刊行された。同巻は、宗教改革の世紀に独創的な思想を残した、シュヴェンクフェルト、フランク、ヴァイゲル、アルントの四者の代表的なテクストを収録している。いずれも

これまで翻訳紹介がほとんどなされてこなかった思想家である。近世ヨーロッパは、さまざまな動乱のうちにあった。宗教改革後の新旧両教の、また新教内での宗教的抗争は、政治的争闘とも重なり収拾のつかない混乱をもたらし、また教会キリスト教の権威を決定的に揺るがした。加えて経験主義的な自然探求と近代科学の興隆が、これまでの世界像の根本的な見直しを迫ってきた。これら近世の神秘家たちのテクストを読むと、彼らがこの時代のそここに大きく口を開けた深淵を直視しつつ、懸命に新たな世界像を構築しようとしていたことが分かる。個々の個性による違いはあるが、そこでは総じてふたつの方向性が共通して認められる。

まずは、中世神秘主義とその宗教実践を引き継ぎつつ、ラディカルな内面主義的信仰理解が打ち出された。シュヴェンクフェルトはその『人間の三種の生について』のなかで、人間の内におけるキリストの霊の作用にもとづく霊性主義的救済論を展開する。こうした志向性は、既成教会への強い批判と「霊の共同性」への熾烈な待望と結びつく。フランクは、『パラドクサ』

において、異邦人をも包摂する神の「非党派性」を説いてやまない。

第二の方向性は、新たに前景化してきた経験的世界（諸国、歴史世界、自然、宇宙）とキリスト教的世界像との統合のこのみである。ヴァイゲルは、『世界の場所についての有益な小論』において、宇宙の無限性という新たな知見を神の無限性と重ね合わせ、そこに浮かぶ「場所性」をもった地球や可視的天界と対比させた。この無限性はまた同時に内的な霊の体験の場として、霊性主義へと接合された。近代の「敬虔な生」が形成されるうえで極めて影響力の大きかったアルントの『真のキリスト教』（抄）も、その第四書で、大宇宙と小宇宙を論じ、それらが「私たちが神とキリストへと導く」ことを纏説する。

本巻に収められたこれらの著作は、内界への沈潜と外界の観照とを深くリンクさせることによって、先に見たこの時代の深淵をあわせて一気に飛び越え、すべての実在を包括する世界像

を提示しようとした。彼らは皆、弾圧と流浪の生に苦しみながら、他方で新たに勃興した市民層からの支持を得た。宗教の個人（主観）化、脱教会化、自然と神性の全体を統一的にとらえるホーリスムの観念や普遍的霊性思想の広まりなど、現代の宗教状況を語る一連のことがすでにこれらの思想の性格を言い当てていることは、これらの思想の近代的先駆性を物語っているとさえ言えよう。

（ふかさわ・ひでたか＝一橋大学大学院教授）

（A5判・六二八頁・本体七九〇〇円＋税・教文館）



新刊



宗教学論叢18

## 夢と幻視の宗教史

【下巻】

河東 仁 編

●A5判上製 本体4,000円＋税

河東 仁 日本の昔話と夢／  
阿部 珠理 ヴィジョンを求めて泣く／  
渡辺 和子 『ギルガメシュ叙事詩』における夢とその周辺／  
佐々木 光俊 アスクレピオス信仰／  
宮内 ぶじ 乃 初期写本挿絵に描かれた創世記の夢／  
細田 あや子 ハインリヒ・ゾイゼのヴィジョン／  
他3篇を収録。

ISBN978-4-86376-037-0

LITHON [リットン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402  
FAX 03-3238-7638

うーん、と唸られる神学的紀行文  
芳賀 力著

## 落ち穂ひろいの旅支度



小島誠志

たとえばここに、カルヴァンの『もしも』という文章がある。「もしもカルヴァンがノウィヨンからパリに出て最初から神学を専攻していたら」と言うのです。「宗教改革は起こらなかったであろう」というのはカルヴァンが学び始めた当時、彼の父親のルートでノウィヨンの司教ジャン・ダンジェストに出会う可能性は十分にあったし、そこで神学を学んでいたら、福音主義と関わる人々と出会うこともなかったに違いない。カトリックの司祭になり、プロテスタント最大の論敵になったのではないか。しかし実際は父親の意向で法学を学ぶこととなり、そのことがやがて、法的センスを兼ね備えたプロテスタント神学者を産み出すことになったのである。

彼の処女作「寛容論」がベストセラーになっていたら、彼は古典学の学者として一生を終えていたかも知れない。

「綱要」を書いたのち、パリに戻ろうとしたが、身の危険を察知しストラスブルクに向かう。しかしフランソワ一世と神聖ローマ皇帝との間に戦争が起こり、ストラスブルクへの道が閉ざされる。止むなくルートを変更しジュネーブに一応の宿を取

った。そこで待っていたのがフアーレル。静かに学究生活にそしめたかったカルヴァンはフアーレルの熱い説得によってジュネーブの町の福音主義的改革に取り組むこととなる。「恥ずかしがり屋で臆病」と自認していたカルヴァンはいまやローマ・カトリック教会との神学的論争の先頭に立つことになるのである。

著者は本書を神学的紀行文と銘打っておられる。ヨーロッパが中心だが、アメリカもあり、終りの三分の一は日本国内の旅のことも記されている。多く旅をする人は、今日のような時代、いくらでもいるに違いない。多く旅する人が多く書けるとは限らない。ただ目先が変わるだけの見聞記なら平板なものになるに違いない。本書がそうならないのは著者の驚くべき教養の広さ、思索の深さが与っていることは明白である。古典や文学、はては建築や音楽に至るまで著者の中で十分に神学的に咀嚼された上で読者に呈示される。うーん、と唸られるのである。

「カーニバルの笑い」という一章。

コメディ（喜劇）の語源はディオニソス祭儀で乱舞して歌

う人々（コモス）に由来しているという。それは日常生活の「外に出る」（エクスタシス）ことで、現実の過酷さから逃れる祝祭行為。それが中世の道化・愚者の伝統となる。それは社会の因習やしきたりを笑い飛ばし、階層や序列をひっくり返し、その束縛から人々を解放する役割を果たした。それはエラスムスの「痴愚神札賛」の思想につながっていく。

ある社会学者が指摘するように、聖書の中にも「聖なる愚者」と呼ぶべき伝統があるのではないか。神の箱の取り戻されたときのあの踊り狂ったダビデ王の姿。ロバの子にまたがって入城したイエス、そのイエスは紫の衣、茨の冠、葦の棒のいでたちで人々の歓声の中、十字架につけられる。それは愚者なる王の戴冠式である。そこに明らかにされるのは、神の愛の最大の逆説ではなかったか。

バツハありゲートルありパウエル・クレールありバルラツハあり、芭蕉や岡倉天心も引用されており、そのすべてが著者の神学的

思索と結ばれている。

これはいい。説教の導入の部分で使えるのではないか、そんなことを考えていたら本書の終りの部分、次の文章に出くわした。

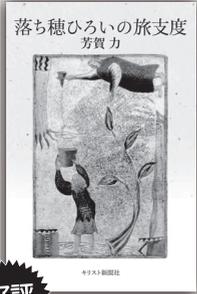
「アイディアも平気でパクリ。自分で苦労して考えもしないで、他人の発想なのに、まるで自分で考えたかのようにすましている」。

さもしい牧師根性を強くたしなめられてしまった。

（おじま・せいし 日本基督教団久万教会牧師）

（四六判・一九〇頁・定価一六〇〇円＋税・キリスト新聞社）

キリスト新聞社の本  
Kirisuto Shinbun, Co., Ltd.



好評  
発売中!

## ▼神学者として注目を浴びる著者による神学的随想集 落ち穂ひろいの旅支度 芳賀力 ●著

本書は「思索の小さな旅」（キリスト新聞社刊）に続く随想集で、旅に寄せての雑感を書き落したものです。神学的紀行文を書くというには筆者のように、取巻のおぼれに与るような落ち穂ひろいの趣きがあります。とは言っても限られた日程なので、学会に向いたついでに強行軍を敢行することもたびたびでした。あまり堅いものはかりでは食傷気味になるので、自分のブログに気軽に記したものを少し加えました。（本書あとがきより）

■四六判 190頁 1600円

キリスト新聞社  
351-0114 埼玉興和光市本町 15-51  
和光プラザ2階  
TEL. 048-424-2067 (価格税別)  
E-Mail. support@kirishin.com  
URL. http://www.kirishin.com

愛するものを失った人の心に寄り添う著者の姿勢の今後にさらに期待。

井上彰三著

## ペットも天国へ行けるの？



## 大和昌平

葬儀産業は唯一の右肩上がりの業界とも言われ、出版界における葬儀本は百家争鳴の時代である。議論を牽引する島田裕己氏は『葬式はいらない』から『墓は、造らない』へと展開し、墓を造り続けることの物理的困難を指摘する。類書は続々と出版される中で井上彰三氏の新著『ペットも天国へ行けるの？』は、人ではなくペットの葬儀をどうするかを問うた異色のキリスト教葬儀論である。

元大手銀行マンの井上氏は退職後に神学に取り組み、キリスト教葬儀を研究テーマとされた。まとめられた論文『心に残るキリスト教のお葬式とは——葬儀の神学序説』は、NCC宗教研究所双書として新教出版社から二〇〇五年に出された。本書はその続編とも言えるだろう。調べのきいたテーマ展開は両書に共通しているが、それ以上に一貫しているのは愛するものを失った人の心に寄り添おうとされる著者の姿勢である。悼む人への優しさが強いがゆえに、人としての自然な心の発露に水をさすものへの反骨精神も窺われる。

前著『心に残るキリスト教のお葬式とは？』では、キリスト

「ペットロス」に陥る人を慰めてあげたいという井上氏の優しい思いが伝わってくる。

ペットも天国に行けるのかという第一の課題については、二人のカトリックの立場からの肯定意見を紹介し、著者自身は「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる」（ルカ12:32）とのイエスの言葉を引いて、次のように述べている。

「小さな群れには、鳥や野原の花も含まれています。ペットはもちろん、すべての被造物は神の前に平等ですから、ペットも間違いなく天国へ行けることでしょう。」（一二二頁）

空の鳥・野の花を見なさいと言われたイエスが、神の国を約束された「小さな群れ」にそれら被造物も含まれるという聖書解釈が示される。そして、すべての被造物は神の前に平等だから、ペットも天国に行けるといふ神学展開がなされるのだが、そここのところをもっと詳しく展開していただきたいかった。

ところで、ペットの仏式葬儀への言及から、著者はイエスの被造物観とブッダの自然観の対比を行って、両者は本質的に同じだと述べておられる（六三―六四頁）。そこで、「山川草木悉有仏性」「衆生本来仏性なり」といふ仏教のテーゼをも挙げておられる。知的な覚醒を目指すブッダの宗教が、インドの輪廻転生説を取り入れ、さらに中国の祖先崇拜を基盤とする儒教とも融合して、東北アジアではすべての生き物は亡き父母たちの

葬儀において焼香があってもいいではないか、とキリスト教界の葬儀のあり方に一石を投じられた。お葬式に焼香がないのは寂しいと感じる日本人の心に寄り添おうとされたのである。本書においては、仏式ではごく自然に行われているペットの葬儀がキリスト教にもあっているのではないか。そして、ペットも天国に行けると言っているのではないかと論じておられる。「ペットの葬儀を考える場合に二つの課題があります」と、著者は問題を整理している。一つは、ペットが死後、天国へ行けるかということであり、もう一つは、家族のように愛してきたペットを亡くした人たちの悲しみにイエスが寄り添うことがあるかどうかということであるという。後者については、「愛する『もの』が人であってもペットであっても『悲しみのいやしにイエスが寄り添う』という点で変わりはないと思います」（七四頁）としている。グリーンフ・ワーク（悲しみの作業）が大切な存在を亡くした人に必要であるという点で、家族のような存在であったペットを亡くした人の悲嘆にも、キリスト教が向き合うべきであるという提言は異論のないところだろう。

転生した姿かもしれないという宗教的世界観をなすに至った。だから、お盆には祖霊棚だけでなく施餓鬼棚を作り、餓鬼地獄に転生しているかもしれない祖先のための慰霊祭をも行ってきたのである。さらに「山川草木」にまで仏となる性質が満ちているとするアニミズム的な日本仏教は、哲学的な真理認識を目指すブッダのインド的な宗教世界とは相当にかけ離れたものとなっている。だから日本ではペットの葬儀ばかりでなく、針供養や筆供養も成り立つことになる。

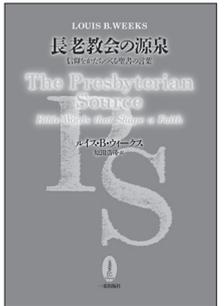
そもそも葬式とは死んだものの遺体を葬る儀式である。そして、われわれ人間にできるのはそこまでであり、死そのものは神の領域であり、われわれの気持ちでどうこうできるものではない。だから、家族のように愛したペットの遺骸を丁寧に葬る式はキリスト教においてもできることだろう。ペットを与えられた創造主の一般恩恵に感謝し、涙をして別れをする葬儀はできるだろう。しかし、ご自身に似せて造られ、キリストから「神の国は近い」と語りかけられているわれわれ人間と、犬や猫との区別をあいまいにはできないのではないだろうか？ 著者の今後の議論の展開に期待したいところである。

井上彰三氏のペット葬儀論、終末論を考える一冊としても薦めたい。

（やまと・しょうへい＝東京基督教大学教授）  
（新書判・二三三頁・本体九〇〇円＋税・ヨベル）

ルイス・B・ウィークス著  
原田浩司訳

## 長老教会の源泉 信仰をかたちづくる聖書の言葉



大石健一

本書の著者であるルイス・B・ウィークスは、アメリカ合衆国長老教会 (PCUSA) の牧師であり、合衆国内にて牧師を歴任した他、アフリカに宣教師として派遣された経験を持つ人物である。ユニオン長老教会神学校の校長も務め、同校の名誉校長として現在も神学生や牧師の指導に当たっている。

第一章において述べられているように、本書は、「長老教会の会員として自分たちが何ものであるのか」を学びつつ、「長老教会の形成についても、意識的に照準を合わせて書かれた聖書研究書」を書いて欲しいという要望に応じて執筆されたものである。したがって本書は、単なる聖書解説書ではない。信仰生活のただ中において、信仰者が聖書の言葉に基づいてどのように生きるべきか、という実践に重きを置いた構成となっている。さらに、長老教会という側面にスポットライトを当てて、長老教会の信徒とされていることがどのような意味を持ち、どのように自分たちの教会を理解し、これを建て上げていくのかという課題を見据えつつ、種々のテーマから聖書の言葉が紐解かれている。要するに、純粹な聖書解説というよりも、長老教

会について知るための平易な手引きであることに比重が置かれた書である。長老教会の歴史、特徴、神学が、系統的かつ詳細に説明されているわけではないが、そのぶん初心者が難解な論述に戸惑うことはないだろう。囁んで含めるような柔らかな語り口が徹底されている。

本書によれば、長老教会は「公同の教会の一員」であり、旧新約「聖書全体を重視」する教会である(第二章)。また、「長老教会は自分たちが生きている文化の変革者」であり、社会や政治や文化といった広範囲な領域での教会の働きをも重んじるとも述べられている。さらに、「私たち長老教会の礼拝は、喜びをめざしてささげられているでしょうか? それとも、私たちは必要以上に、上品で規律正しくあることに、自分たちの価値を制限づけてはいないでしょうか?」という反省を込めた問いかけもなされている(第五章)。加えて、いわゆる予定論が巷では悪名高きものとして認知されていることを前提として、自戒の念とともに、独り歩きた予定論をめぐる偏見の修正の言葉も綴られている(第十二章)。

ここまで読んで既に薄々気づいた読者もいらっしやると思うが、制度や信条を必要以上に重んじ、教義に精通しているが実践を欠くといった、ややもすれば長老教会に起こり得る傾向や、周囲から寄せられがちな誤解や偏見が意識されており、これらに対する紳士的な応答が試みられているように見える。ひよつとすると、ウルトラ保守的な長老主義に対して一定の距離を保つ姿勢も表されているかもしれない。何をもってバランスの中心点とするかという問題はあがあるが、著者の自己洞察の鋭さとバランス感覚は、並大抵のものではない。何かに対する攻撃的な批判の言葉が並べられることはなく、長老主義におけるこれまでの伝統や様々なありようを誠実に受けとめ、自己理解と自己反省を深めながら、これから長老教会を知ろうという初心の方に対して向き合おうという、実に謙虚にして軽妙な言葉が随所にちりばめられている。知識の拡充を求める教職レベルの方には物たりないところがあるかも知れないが、著者の謙った姿勢

と平易な語り口から学ぶべきものは豊富である。初心の方には長老主義の入門書として本書が推奨されることは言うまでもない。

翻訳者である原田浩司氏は、これまでもドナルド・K・マツキム『長老教会の問い、長老教会の答え』(二〇〇六年)や、ドナルド・マクラウド『長老教会の大切なつとめ』(二〇一〇年)等、長老教会関連の信徒向けの書を精力的に訳されている。本書の訳文も平易で、「やさしく」かつ(読み手に)「優しい」。長老教会という伝統に生きながらも「堅くて、難しい」と日頃から悩みを抱えている信徒の方々のために、高圧的な仕方ではなく、身を低くしてやさしく優しく教えを説こうとする原田氏の愛を訳文から感じてやまない。

(おおいし・けんいち 日本基督教団茨木春日丘教会牧師)  
(A5判・一五〇頁・本体二〇〇〇円+税・一麦出版社)



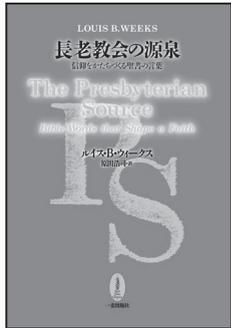
## 長老教会の源泉

信仰をかたちづくる聖書の言葉

ルイス・B・ウィークス

Louis B. Weeks

原田浩司\*訳



聖書に傾聴することをとおしてこそ、わたしたちの教会を——養い支える明確な教え——受肉、神の霊が共におられるという約束、永遠の命の希望、この世に対する責任、福音宣教の必要性——が示される。

A5判

定価 [本体 2,000 + 税] 円  
ISBN978-4-86325-064-2



株式会社 一麦出版社

札幌市南区北ノ沢 3 丁目 4-10

TEL (011) 578-5888

http://www.ichibaku.co.jp  
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

近代神学の古典の現代的意義  
アドルフ・フォン・ハルナック著  
深井智朗訳・解題

## キリスト教の本質



西原廉太

英国のオックスフォード大学の教育は、言わずと知れたチュートリアルが中心である。チュートリアルでは、毎週、何冊もの文献購読が課せられ、それらを読んだ上で教員から課される小論文を執筆する。オックスフォードでは、「君は今、何を勉強しているか」とは聞かず、「君は今、何を読んでいるか」と尋ね合う、というの有名な話である。チュートリアルを通して読むべき文献は、領域毎にほぼ決まっている。さて、オックスフォードで紹介される「神学」の領域で読まれるべき文献目録に不可欠な著作の一つが、本書、ハルナックの『キリスト教の本質』に他ならない。

アドルフ・フォン・ハルナックは、一八五一年に生まれる。ベルリン大学神学部教授として一八九九年から一九〇〇年にかけて、ベルリン大学全学部生を対象に行った講義録を中心にまとめられたものが、本書『キリスト教の本質』である。近代自由主義神学、ことに近代以降のドイツ神学思想史における記念碑的作品であり、本書を通してハルナックが提示した「問い」は、キリスト教神学の枠内に収まらず、ユダヤ教神学者であるマルティン・ブーバーやレオ・ベックからの批判的応答も含め

て、他の宗教世界、社会や歴史の解説にも大きな影響を与えてきたものである。本書はハルナック自身が序文でも述べているように、早くからドイツ語以外の多数の言語に翻訳され、初版が発行されてから僅か二年後に、抄訳ではあったが、高木千太郎によって邦訳も出されている。その後、山谷省吾が一九二五年に翻訳、一九三九年に改訳版を出版し、一九七七年に訳はそのままで新装版が発行され、これまで、私たちはこの山谷訳を邦訳としては手がかりにしてきた。ここに、『十九世紀のドイツ・プロテスタントイイズム—ヴィルヘルム帝政期における神学の社会的機能についての研究』（教文館、二〇〇九年）などの著作を通して、この時代のドイツ神学思想研究の第一人者である、深井智朗氏の手による新訳が与えられたことを、心から喜びたい。

ハルナックの本書執筆の趣意は、「キリスト教の本質とは何か」という設問に対して、類まれな教会史家としてのハルナックの基盤であるところの歴史学をツールとして、その歴史から得られた生の体験を通して解答するところにあった。ハルナックは、キリスト教の核心であるイエスの宣教を、このように語

一方で、カトリックや正教会の中にも、福音の本質が存在することを承認する。彼のこうした教会論は、その時代には用語すら定着していなかった、いわゆる「エキユメニズム」の先取り的議論であったことを、確認することができる。

訳者による『解題』が貴重である。実は、文豪、森鷗外こそが、ハルナックの「神学的テキスト」の背後にある「政治的暗号」を驚くほど正確に読み解いていたことを明らかにし、また、カール・バルトからの御用学者であるとの批判や、第一次世界大戦の戦争イデオログと見るようなレッテル貼りが、いかに皮相的なものであるかを、ハルナックの「逆立ちしたナシヨナリズム」を中心に明解に論じる。

新訳の発刊により、現代的コンテキストにおける新たなハルナック論が展開されることを期待したい。

(にしはら・れんたー立教大学副総長)

(四六判・三九二頁・本体四〇〇円＋税・春秋社)

## なぜ神は悔いるのか 旧約的 神観の深層

イエルク・イエレミアス 関根清三／丸山まつ 訳



超越者でありながら、神が「思いを変え」るのはなぜか。「悔いる神」のモチーフから、旧約聖書における、究極的には人類を救おうとする神の意志に迫る。

A5判 上製・226頁・3240円

## 「神が与える信仰を、人は教えるのか」を問う

## 新約聖書の教育思想 山内一郎



福音書は「教師イエス」をどのように描いているか、原始教会は信徒の形成をどう担ったかを明らかにする、教会教育を考えるための必読基本文献。

A5判 上製・330頁・3456円

日本キリスト教団出版局  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457  
E-mail eigyouto@bp.uccj.or.jp (価格8%税込)  
<http://bp-uccj.jp>

賀川豊彦の信仰の根源にあるイエス像  
賀川豊彦著

復刻版  
小説 キリスト



佐藤 研

キリスト教社会運動家として国際的に知られている賀川豊彦（一八八八—一九六〇年）が一九三八年に小説として発刊したイエス物語の読みやすい復刻版である。作者は五年の歳月をかけ、「キリストの霊的身長の基格をもう一度現代に持つてきたいために」（五二九頁）この五百頁を越える大作を執筆した。ベストセラーの『死線を越えて』（一九二〇年）等の作品のゆえに一九四七—四八年のノーベル文学賞候補にまで挙げられた賀川であつてみれば、無謀な試みではない。問題は、どこまでこの作品が「文学」として成功しているかである。

作者が豊かな文学的描写力をもっていることは疑いえない。随所に織り込まれた情景や人物の描写は達意であり、自然描写も美しい。また、人間関係にまつわる意外なプロットの数々も興味深い。例えば、冒頭でパテスマのヨハネの弟子たちが、斬首された師の亡骸をマケロスの要塞に引き取りに行く場面などは、独自のリアリティがある。また、革命家エヒウとその娘ドルシラのエピソード群は作者の創作であるが、逮捕された父を請け出すことのできない娘の苦しみと、その父の刑死は、全

編を貫く副主題の一つとして生きている。

ただし、何よりも問題なのはイエス自身のリアリティである。この点では多大な疑問を感じる。まず、イエスは福音書に書いてある如く、数々の「奇蹟」を行ういわば超人として描かれる。病人はことごとく癒す。パンを増やして五千人に与える。ナインの若者をも死から甦らすし、死去して四日になるラザロをも復活さす、等々。ただその際、福音書の記事以上の詳しい描写はほとんどなく、現実には何が起こったのリアルに伝えられることはない。また、それほどの超絶奇蹟行者のイエスが、上記ドルシラが父エヒウを請け出すために金の工面に奔走している時——自らその「ドルシラの傍に腰をおろし、人生の悲劇に泣」（三二七頁）きはするもの——なぜ最後に必要な五十シケルを「増やして」やれないのか、不可解である。またイエスは、激しい殴打や鉄片の付いた鞭打ちを蒙り、最後には刑死するが、終始完璧に平穏を保っている。肉体を持った人間に当然の苦悩が描写されることはほとんどなく、どこか非現実性を漂わす。また、このような平和主義者のイエスが、なぜ神殿で両

替屋のテーブルを覆えしたり、商人達を追い払う等の狼藉を働いたのか、その必然性はどこにも説明されない。また、作品の最後には「復活」に関する章が来るが、内容は作者の高揚した散文詩であつて、事件の流れを追う小説的技法は唐突に放棄される。これらを通して見るならば、この「イエス」は、文学としては甚だしく現実感を欠いていると言わざるを得ない。

更にこれに聖書学的な論評を加えなければならぬ。勿論、本作品が書かれた一九三八年頃は、日本で聖書学を受容するのは極めて困難であつた。それでも作者は最善を尽くして歴史的情報を収集し、また、自らパレスチナの地に二度も足を運んで（加山久夫氏の「編者あとがき」による）地勢的な情報を収集している。この努力は評価してよい。但し作者は、聖書学本来の課題である伝承分析は全く行っていない。本書でのイエスは、共観福音書全編のみならず、ヨハネ福音書のイエスの言葉（ほぼ全てが創作物）をも真正の言辞として取扱ひ、更には各福音

書間にイエス観の相違があることを一切承知していない。四福音書の記述に無批判的な権威を認めるので、例えばイエスは処刑柱の上で、四福音書に出てくる言葉のすべてを語つたという、調和福音書的な寄せ集めの映像となる。更には、イエスの死は彼自らが「贖罪愛」をもつて「人類を救う」（三六五頁）ために死んだものというドグマ的大前提がある。しかしこのようなイエス理解に対しては、現在の聖書学は極端に警戒的である。即ちこのイエスは、現在の聖書学の知見からは承認され難い独自の伝統的信仰空間を浮遊している。小説としてのリアリティの希薄さも、これと無関係ではない。

（さとう・みかく＝元立教大学教員）

ただし、本書は、賀川豊彦のイエス像を知るためには、極めて高い歴史的価値を持つことは疑い得ない。広義の人間研究の書としては今日でも一読に値すると言えよう。

〔復刻版〕〈初版一九三八年改造社刊〕

小説

キリスト

賀川豊彦〔著〕

〔544頁上製〕3,000円（税別）

賀川は渾身五年の歳月をかけて、この小説にキリストの愛の姿を描いた。

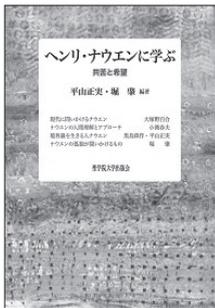
牧師である賀川が社会運動に関わることについて、「私はイエスの弟子だから社会運動を行うのです」と語るように、彼の幅広い社会運動の思想と実践の根底には、イエスのように生きたいという彼のキリスト信仰がありました。本書はまさに「賀川のイエス・キリスト」なのです。

（賀川豊彦記念松沢資料館館長 加山久夫「編者あとがき」）

株式会社 ミルトス <http://myrtos.co.jp>  
pub@myrtos.co.jp  
〒102-0073 東京都千代田区九段北 1-10-5-2F  
Tel: 03-3288-2200 Fax: 03-3288-2225

ナウエンが辿った人生の旅  
平山正実、堀 肇 編著

## ヘンリ・ナウエンに学ぶ 共苦と希望



斎藤 衛

本書は二〇一三年二月十三日に聖学院大学にて開催された「ヘンリ・ナウエンに学ぶ苦しみと希望——祈り、共苦、コミユニティ」と題するシンポジウムの実りとして出版されたものである。ナウエンの文章に触発を受けながら、しかし著作すべてを読み進めるまでには至らない私のような読者にとっては、ナウエンの勘所を教えてくれる良書である。すなわち、点として知っていたナウエンが線となりやがて面を形作り、立体的に深く息づくナウエン像をいただける書である。

第Ⅰ部に収められているのは、大塚野百合氏の「現代に問いかけるナウエン」と題する主題講演である。自らに与えられた霊的洞察、霊的励ましを述べ、なかでも孤独について「神の前で一人で静かに祈ること。これこそ現代病である孤独に勝つ道なのです」（二七頁）とナウエンの言葉を示し、教会の在り方を問うている。この時代に教会はナウエンから学べと。ユーモアを交えた言葉の勢いと瑞々しさを通して、ナウエンがいかに重要なメッセージを携えているか、読者の心を開かせる講演である。

ナウエンの言葉が今もなお現代人の心を捉えているのは何故なのか、このことを分析的に解いているのが小渕春夫氏の発題だ。「ナウエンの人間理解とアプローチ」と題してナウエンの創作の秘密を解き明かしてくれる。ナウエンはその創作に独自の三つの方法を展開したとし、それにより読者を「閃き」に導いた。その閃きに至る道筋にナウエンはイメージとストーリーを活用するが、この方法は、あまりに「言語理解中心、聴覚優位の観念の世界」（六六頁）に重きを置いてきたプロテスタント教会がいま一度真摯に耳傾けるべき事柄ではないかと問題提起している。

第Ⅱ部には平山正実氏と黒鳥偉作氏の共著となる論文と、堀肇氏の論文が収められている。そもそも本書のもととなるシンポジウムは聖学院大学総合研究所・カウンセリング研究センター所長であった平山正実氏が、堀肇氏に相談したことがきっかけであったと（はじめに）に記されている。平山氏がこの企画を呼びかけ、堀氏はこれに即座に賛成したとある。この両著者のナウエンへの熱意が本書を生み出した。

「境界線を生きる人ナウエン」と題された論文は一から五章を平山氏が、六・七章を黒鳥氏が執筆している。「境界線を生きる人」とはその題からして慧眼に感嘆する。「ヘンリ・ナウエンは、光の世界と闇の世界の境界線上に生きる聖職者であった」（八一頁）と平山氏は世界的な作家・霊性指導者の真実を見抜いた。この境界線上に生きようとすれば、「現実の世界は当然、緊張と葛藤、分裂の危機にさらされることになる。そのため、ナウエンは一瞬一瞬、不安定で綱渡りのな生き方を自らに課すことになった」（八二頁）。あの閃きを与える言葉の出所が知らされる。

黒鳥氏はナウエンの共苦の姿勢に注目し、医療者にとつてのキユア (cure) とケア (care) に加え、「共に傷を抱える者として創造的に治療関係を発展させていく」（一〇〇頁）キャリー (carry) の姿を提案している。この三つのCが治療者と思者とという一方的な関係ではなく、医療における魂への配慮の第一歩となることを示してくれる。

さて、最後に収められた堀肇氏による「ナウエンの孤独が問いかけるもの——ロンリネスからソリチュードへ」と題した

論文は、ナウエンの核心的部分として「孤独」に焦点をあて、論じている。その「孤独」（ロンリネス）が「神と共に独りであること」のできる世界（ソリチュード）へと転換がはかられる時、孤独はただの孤独ではなく、むしろ人生の贈り物として受け取り直すことができる。堀氏はこの変遷と転換をナウエンの著作から読み解いている。ナウエンはラルシュ共同体へ辿り着き、そこでの「魂の暗闇」という危機的出来事を通して霊的回復を遂げたとみている。「ナウエンの全生涯の霊的旅路は、ロンリネスからソリチュードへの移行の旅といっても過言ではない」（一二〇頁）。この旅は私たちも同様に辿らねばならない旅だろう。結論に「真の共同体」の形成こそが孤独についての今後の課題を解く鍵だと示している。

私の本棚にあるナウエンの書籍にこれまでとは違う観点から読み解くための本書が加わった。いま一度ナウエンの著作を静まって読み、深いインサイトの喜びをいただきたいと思う。

（さいとう・まよる 東京ルーテルセンター教会牧師）

（A5判・二四三頁・本体一八〇〇円＋税・聖学院大学出版会）

既刊案内 (2014年6月~7月) (定価はすべて本体価格+税)

著 訳・編 者	書 名	判型	頁	本体価格	版 元	発行日
宮 崎 彌 男 訳	ウ エ ス ト ミ ン ス タ ー 大 教 理 問 答	A 5	100	1,200	教 文 館	6/10
市 川 一 宏	[おめでとう]で始まり[ありがとう]で終わる人生 — 福 祉 と キ リ ス ト 教	四六	202	1,400	〃	6/25
藤 原 治	回帰としてのカトリック	A 5	336	2,400	〃	6/30
R.L.ウィルケン著 土 井 健 司 訳	古代キリスト教思想の精神	A 5	356	4,100	〃	6/30
並 木 浩 一	旧 約 聖 書 の 水 脈 — 並 木 浩 一 著 作 集 3	A 5	350	4,000	日 本 キ リ ス ト 教 団 出 版 局	6/6
松 本 敏 之	マタイ福音書を読もう2 — 正義と平和の口づけ	四六	234	1,800	〃	6/20
宮 田 光 雄	バルメン宣言の政治学	B6変	50	500	新 教 出 版 社	6/18
ボンヘッファー著 森野善右衛門訳	共に生きる生活 【ハンディ版】	B6変	232	1,600	〃	6/20
ルドルフ・ブルトマン著 深井智朗訳・解題	ブルトマンとナチズム — 「創造の秩序」と国家社会主義	四六	130	1,850	〃	6/25
鈴木範久、 田中良彦編著	対照・太宰治と聖書	A 5	192	3,800	聖 公 会 出 版	6/13
井 上 彰 三	ベットも天国へ行けるの?	新書	132	900	ヨ ベ ル	6/20
ルイス・B・ウィークス著 原 田 浩 司 訳	長老教会の源泉	A 5	150	2,000	一 麦 出 版 社	6/22
栗 林 文 雄	〈 声 〉 を 育 て る — 歌 いた い 人 の た め の ヴ ェ イ ス ワ ー ク	A5変	122	1,600	〃	6/15
関 根 清 三、 丸 山 ま つ 訳	なぜ神は悔いるのか — 旧約的神観の深層	A 5	226	3,000	日 本 キ リ ス ト 教 団 出 版 局	7/11
山 内 一 郎	新約聖書の教育思想	A 5	330	3,200	〃	7/22
吾 妻 國 年	歌集いのちの四季に	四六	290	1,500	教 文 館	7/15
アウグスティヌス著 金子晴勇、小池三郎訳	アウグスティヌス神学著作集 — キリスト教古典叢書	A 5	746	6,800	〃	7/31
野 村 喬	唯一神教の創出とその展開 — 預言者・イエス・パウロの働き	四六	293	2,000	新 教 出 版 社	7/18
J.L.フロマートカ著 佐 藤 優 監 訳	人間への途上にある福音 — キリスト教信仰論	四六	380	3,500	〃	7/31
河 東 仁 編	夢と幻視の宗教史 [下巻] — 宗教史学論叢18	A 5	308	4,000	リ ト ン	7/15

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www7.ocn.ne.jp/~zen-book/	zenrinkan_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台市青葉区1-36 敷島センター・1771F	022-223-2736	共用		fqcwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区稲32 2 様ヶ丘スチオンセンタービル	043-238-1224	043-247-3072		keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3235-5681	03-3235-5682	http://seikokai-publishing.jimdo.com	nsk-bookshop@company.email.ne.jp	00140-8-50880
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://members3.com.home.ne.jp/taishindo/	taishindo@icom.home.ne.jp	00110-8-95827
キリスト教書店ハンナ	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3269-4490	03-3269-4491		kiristoku.youshoten@narae@ybb.ne.jp	00150-9-595509
ハイブルハウス南青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231	http://www7.biglobe.ne.jp/~yldnrcs/bs/uev.html	biblehouse@bible.or.jp	00250-4-2512
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881		sksch@mva.biglobe.ne.jp	00540-6-82826
清光書店	951-8114	新潟市営所通 一番町313	025-229-0656	共用			00540-6-82826
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612		info@s-seibun.co.jp	0810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋市千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepage3.nifty.com/seibunsta/	nagoya-seibunsta@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		kjorden@mbx.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://www11.ocn.ne.jp/~osakabos	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店	591-8044	堺市北区中長尾町2-1-18	072-257-0909	072-253-6132		sakai-x@topaz.plala.or.jp	00960-9-47426
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18 三鷹ビル2F	078-331-7569	078-331-9833			01150-7-45120
広島聖文舎	730-0016	広島市中区鞆町7-28	082-228-4914	082-223-0951			01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shirt.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413		sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上雷野5-2-18	093-967-0321	共用	http://kcbok.net/	kcbokcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484			01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			017304-45044
沖繩キリスト教書店	901-2131	浦添市牧港1-60-6	098-877-7283	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

新教出版社

# 福音と世界

2014年10月号

## 特集

国家を神学する——我らの国籍はいずこに？

グローバリゼーションの中の国家とは何か、教会は国家といかに関わるのか？

寄稿者 山崎ランサム和彦、石浜みかる、崔勝久、木原葉子、津田真奈美

都市は希望の場所ですか？……J・モルトマン

韓国「小さな教会運動」②……金鎮虎

連載 高橋優子、岩田雅、松谷睦介、佐藤優、青野太潮、寺園喜基、山本大丙、沢知恵他

A5判・本体588円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

# ヘブライ人への手紙

宮平望著

私訳と解説

好評シリーズ



信徒の聖書研究に最適の注解書。聖書全巻の逐条的コメントリを志す壮図の第10作目。聖書の内的証言を最優先した、メッセージ豊かな釈義。 本体2200円

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1  
TEL : 03-3260-6148  
Email: sales@shinkyoy-pb.com

## 編集室から

都会の喧噪を離れ、八ヶ岳の麓にきている。標高も高く空気が澄んでいるので、容赦ない日差しにジリジリと焼き付けられることを感じる。

夜、空を見上げると、数えきれないほどの星が瞬いている。東京でも同じ空を見上げているのか、と疑ってしまうほどの。星座を眺めながら、——矛盾するかもしれない——二つのことを想った。

一つは、人の存在はまるで星座のようだ、ということ。ひとりの人が存在するには、一体何人の人が関わっているのだろうか。生物学的に考えれば、親や祖父父母、そしてさらにその上の世代の人々がいなければ、私という人は存在しないことになる。血縁以外の友人や仲間といった存在も私たちには不可欠だ。

また、私たちは無意識のうちに、多くの芸術や思想に影響されつつ物事を考え、思いめぐらしている。自分が生きる場や時間とは全く異なるそれらのものが、自分を作り上げているのだ。

つまりひとりのひとは、人や歴史、思想といった、時間も場所もまったく異なる無数の星からなる集合体——つまり、星座——であるとも言えるのではないだろうか。

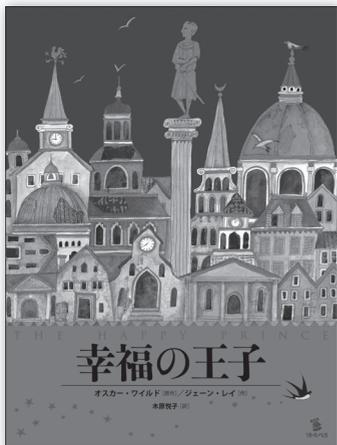
もう一つは、私たち一人ひとは星であり、自分以外の他者と星座を作り上げること。存在するときや場が異なる星たちから星座がなっているように、私たちも、自分も見知らぬ星とともに、一つの世界を構成しているのだろうか。

宮沢賢治の『温く含んだ南の風が』という作品のなかに、このような一節がある。

「……星はもうそのやさしい面影（アントリッツ）を恢復しそらはふた、び古代意欲の曼陀羅になる」

定められたときと場に生かされている私たちは、他者であり、ときや場も異なる星たちと、どのような星座——曼荼羅——を描いてゆくのだろうか。そして後世の人々は、私という星をどのような星とともに眺めるのだろうか。（かとう）

クリスマスプレゼントに最適な絵本&児童書が新発売!



# 幸福の王子

オスカー・ワイルド 原作  
ジェーン・レイ 作 木原悦子 訳

新刊  
絵本

「幸福の王子」の像と出会ったツバメは、王子に自分の体から宝石や金箔をはぎ取って、町の人たちに与えるようにと頼まれます。やがて町からは笑い声が響き、空からは雪が降り……。



◆301×229mm・上製・32頁・1,728円

## エッセイの木

クリスマスまでの24のお話

ジェラルディン・マコックラン  
沢 知恵 訳 池谷陽子 絵

児童文学の名手が紡ぎ出す「アダムとエバ」から「イエス」に至る24の物語。イエス様の先祖を示す「エッセイの木」を彫るおじいさんが、男の子に聖書のお話を語る。

◆A5判 上製・154頁・1,944円

聖書の  
お話集



イベントのご案内

## 『並木浩一著作集』 完結記念シンポジウム

●発題 司会：永野茂洋

「旧約学者・並木浩一」 小友 聡

「教師・並木浩一」 森本あんり

「信仰者・並木浩一」 高橋 一

「表現者・並木浩一」 奥泉 光

日時 2014年11月28日(金)  
18時～20時30分

会場 日本基督教団  
中渋谷教会 礼拝堂

※入場無料(要申込)

※詳細はホームページに掲載したチラシをご覧ください。

申込み 日本キリスト教団出版局 出版第一課

TEL 03-3204-0424 FAX 03-3204-0457  
e-mail shoseki2@bp.uccj.or.jp

# よくわかるクリスマス

嶺重淑、波部雄一郎編

● A5判・226頁・本体1,500円



クリスマスの起源と成立事情、サンタクロースの誕生と変遷、国によってこんなに違う?! クリスマスの祝いかた、物語・美術・音楽・映画のモチーフとしてのクリスマス……。13の章と14のコラムで味わい尽くすクリスマスのおすすめ!

好評発売中

山北宣久編『愛の祭典——クリスマスアンソロジー』

● 小B6判・230頁・本体1,800円

内外の哲学者、神学者、文学者、詩人の祈りやメッセージ、古くから語りつがれ、また新たに生まれた詩や物語の数々をまとめた心にしみるクリスマス詞華集。

# キリスト教の主要神学者下

リチャード・シモンから  
カール・ラーナーまで

F・W・グラーフ編

安酸敏眞監訳



2000年の神学史の中で特に異彩を放つ古典的代表者を精選し、彼らの生涯・著作・影響を通して、神学の争点と全体像を浮き彫りにする意欲的な試み。下巻では宗教改革後期から20世紀に至るまでの17名の神学者を紹介する。

● A5判・416頁・本体4,200円

# 礼拝の祈り

手引きと例文

鈴木崇巨

● 四六判・166頁・本体1,400円



長年の豊富な牧会経験をもとにした丁寧な祈りの手引きと、牧会祈禱と献金祈禱、招詞の例文を多数収録。願いや感謝を中心とした祈りから神を賛美する祈りへ。礼拝をより豊かにすることを願う牧師・信徒必携の書。

好評発売中

加藤常昭『祈禱集 教会に生きる祈り』

● 四六判変形・192頁・本体1,800円

第1部には、鎌倉雪ノ下教会の主日礼拝で実際になされた祈り22篇を、第2部には、本書のために書きおろされた日々の祈り21篇を収める。

9月の新刊 (価格表示は税抜)

一九五七年七月一七日 第三種郵便物認可  
二〇一四年十月一日発行 (毎月二四日発行)  
本のひろば 第六八号 二〇一四年十月号

発行所 正の会 東京都新宿区新小川町九一 一般財団法人キリスト教文書センター  
電話〇三二三六〇六五〇 振替〇一七〇一五一一二六七  
発行人 本村利春 編集人 中川 忠 印刷所 平河工業社  
発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話〇三二六〇一五六七〇

定価七八円 (税抜七二円) (〒62円)  
一年分一三〇〇円 (送料共)



教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1 TEL03-3561-5549

本のご注文は(e-shop 教文館)へ! <http://shop-kyobunkwan.com/>

e-shop 教文館